

2016年度 大阪大学 前期 国語

Ⅰ 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★★☆	30分	白井聡『反知性主義、その世界的文脈と日本の特徴』からの出題。この文章が収録されている『日本の反知性主義』（晶文社）は、反知性主義について述べられた文章が複数収録されており、2016年度は東京大学でも同書からの出題がみられた。いってみれば「反知性主義ブーム」の年だったのかもしれない。	本文では難しい言葉が多く使われていたため、読みにくさを感じた受験生も多かったものと思われるが、ロジックそのものは非常に明快なものであった。設問に關して言うと、一見簡単そうに見える問題が並んだが、記述問題に対する準備をきちんとしていた人とそうでない人の出来がはっきり分かれるような問題構成だったという印象を受ける。また、2016年度は、言葉の知識を必要とする問題が多かったように思う。 問一はかなり難しかったと思われる。市販の漢字テキストを流し読みした程度では太刀打ちできなかっただろう。

傾向と対策
問二では、言葉の意味を説明することが求められた。言葉の意味をなんとなく理解しているだけでは不十分であり、その意味を言語化できることが重要だということを受験生は肝に銘じてほしい。「棹差す」の言葉の意味がわかっていることが望ましいが、たとえ意味を知らなかったとしても、文脈から判断できるようにしたいものである。問三では、「比喩」を説明することが求められたが、これは「陰画」という言葉の意味を知らなかった人は解けなかったものと思われる。問四では、「微妙な」のニュアンスをどのように表現するかで解答の出来に差がついたものと思われる。このように、言葉の知識から記述力まで、総合的な国語力がなしい人はとても太刀打ちできない問題だった。日頃から、これらの力をバランスよく身につけることを意識して勉強してほしい。

解答

- 問一 (a) ばっこ (b) ことほいだ (c) きせんとひ
 (d) いきどおり (e) びようそう (f) わきまえる
- 問二 調子を合わせている (9字)
- 問三 現実にある知性の不平等とそれに伴う富や権力の不平等を不正だとして否認し、卓越者を非難する思考回路は、民主制の前提となる、万人が自由かつ平等であるという近代原理の裏返しのかえ方として導かれたという意味。(100字)
- 問四 大衆民主主義社会では反知性主義が社会に広く根差しているため、為

政者は大衆の知性への憎悪を権力資源として利用し、自らの政治権力の強化を図るが、その一方で大衆が反知性主義的発想から、現実にある権力の不平等を不正と捉え、為政者に対して不満を爆発させる危険性もあり、為政者は自らの政治権力を保持するうえで板挟みの状態にあるから。(160字)

本文解説

段落解説

I 反知性主義がはびこる現代社会の構造的状況(第1～4段落)

「今日の日本社会」では「反知性主義」がはびこっているが、このような事態が生じている「現代社会の構造的状況」として、「二つの文脈」が挙げられる。一つは、「一九八〇年代あたりから世界的に顕在化した資本主義の新段階において、反知性主義の風潮は民主制の基本的「様式」と「ならざるを得ない」という事情である」。もう一つは、「制度的学問がそれに」合わせているところの『人間の死滅』という状況が挙げられる。「近代性の発展は、世界の中心を神から人へと移す」という原理の確立を伴って、「近代の学問は、『人間の完成』という理念」を掲げてきた。「学問の発展」は、「人間の最高の発展」の実現を究極目標とした「人間の知性の限らない発展」に貢献するとみなされていたが、「高度な知性と豊かな内面性を持った人間」という理想像は「消滅し」てしまったのである。

II 「反知性主義」の定義(第5段落)

『アメリカの反知性主義』によれば、「反知性主義とは「知的な生き方およびそれを代表するとされる人びとにたいする憤りと疑惑」であり、「そのよ

うな生き方の価値を極小化しようとする傾向」と定義される。「ここでポイントとなっているのは、反知性主義が積極的に攻撃的な原理であるということ」である。つまり、反知性主義とは「知的な事柄に対して無関心であったり、知性が不在であったりすること」ではなく、「知性の本質的な意味での働きに対して侮蔑的で攻撃的な態度を取ること」に、その核心が見出されるものなのである。

III 反知性主義と権力との関係性(第6～10段落)

反知性主義は、政治における重要な要素である。「反知性主義の類似物として」「愚民化政策というものが古代からあり、「為政者が、大衆が持つ知性への憎悪を操作・利用して動員し、それによって政敵を武装解除する」というようなことは、歴史上無数に繰り返されてきた」と考えられる。

ここで注意すべきなのは、大衆民主主義の時代が到来することによって、反知性主義が、大衆の持続的な性質となる可能性が現れるという点である。つまり、かつての身分制社会においては、「生まれながら」の格差として正当化されていた「知性の不平等」と、それに関連する「実際の富や権力の不平等」は、大衆にも同等の発言権が与えられた民主制のもとでは、「度し難い不正」であるとされ、「不満の種」とならざるを得なくなるのである。そこに現れるのは、弱者から強者への恨みや憎しみが渦巻く世界である。そこでは、『〇〇が私より富んでいるのは、〇〇が不正を働いているからだ』という思考回路が強力なものとなる。「このような「現実にある差異を否認することによって、卓越者を悪党に仕立ててしまふ」という思考回路に焦点があてられるというのは、「自由で平等な人間」という近代原理の裏返しの結果であるといえる。

また、「富や社会的地位の場合と同様に」、本当に知的な精神や態度に対し

ても、「単なる気取りや見かけ倒しにすぎないのではないか」という疑惑が向けられるようになる。そこでは、「〇〇が私より知的に見える」という状況を考えたときに、それは「〇〇が私より知的に優れているからだ」という可能性が、あらかじめ排除される。そして、客観的な事実から、『〇〇』の知的優位を『私』が認めざるを得なくなったとき、それでもなお『平等』を維持するために、「知的な事柄全般が本当は役に立たない余計なものにすぎない」と考えるようになるのである。この考え方はまさに、反知性主義の基本的な方向性であるといえる。このように、大衆が政治参加する民主主義社会では、「反知性主義の心情」が、社会に潜在的ながらも広く根差すようになり、「政治権力は」「この心情を権力資源として取り込みつつ、かつそれが圧倒的な覇権を握ることを防ぐ」という微妙な舵取りを迫られる」のである。

百字要旨

大衆民主主義社会では、不平等は不正として糾弾され、不平等をもたらす知性は余計なものだという反知性主義の心情をもたらす。その心情は社会に広く根差しており、政治権力はそれを適切に管理することが必要となる。

(100字)

用語解説

―出典：『広辞苑 第六版』(岩波書店) (ただし、※のついた語義は解説執筆者による)

跋扈 上を無視して権勢を自由にすること。転じて一般に、勝手気ままにふるまうこと。のさばりはびこること。

フォーダイズム ※大量生産と大量消費にもとづき高成長を可能にする経済体制。

リベラリズム 自由主義

モード 方法。様式。

(服装などの)流行。

棹差す 棹を水底につきさして、舟を進める。転じて、時流に乗る。また、時流にさからう意に誤用することがある。

ヒューマニズム ①一般に人間的(ヒューマン)なことを尊重する思想。中

世末期において人間の解放はギリシア・ラテンの古典へ遡ることにより遂行されたので、ヒューマニズムは人文主義、古典研究として始まった。

②人道主義。

形骸 からだ。肉体。むくろ。生命や精神のないからだ。建物などのさらされた骨組。

中身が失われて外形だけ残っているもの。

言祝ぐ ことばで祝福する。

貴賤 貴いことと賤しいこと。身分の高い人と低い人。

都鄙 みやこといなか。

マッカーシズム アメリカ共和党上院議員マッカーシーの行った反共活動をいう。マッカーシーは、1950年2月、国務省内の「赤色分子」二百余名の追放要求を皮切りに、「赤狩り」によって冷戦体制に批判的な人々を多数指弾し、失脚させたが、54年12月上院の問責決議によって失脚。

病巣 病に侵されている箇所。病原のある箇所。

愚民 おろかな人民。無知な民衆。

為政 政治をすること。政治に当ること。

エートス 人間の持続的な性格の面を意味する語。

ある民族や社会集団にゆきわたっている道徳的な慣習・雰囲気。

エトス。

分を弁える ※自分の身の程を知り、出過ぎたまねをしない。

ルサンチマン ニーチェの用語。弱者が強者に対する憎悪や復讐心を蓄積させていること。奴隷道徳の源泉であるとされる。

一般に、怨恨・憎悪・嫉妬などの感情が反復され内攻して心に積っている状態。

前景化 ※ある部分に焦点が当たり、際立つこと。

陰画 実物と明暗が逆になっている画像。カラー写真の陰画では、更に色彩が被写体の補色となっている。一般の写真の場合、これを印画紙やフィルムに焼き付けて陽画を得る。ネガ。

警鐘 危険の予告、警戒のために鳴らす鐘。はやがね。比喩的に、警告の意。

覇権 武力や権謀をもって競争者を抑えて得た権力。覇者としての権力。頭領の権力。転じて、競技などで優勝者としての資格。

設問解説

問一

解答 (a) ばっこ (b) ことほいだ (c) きせんとひ

(d) いきどおり (e) びょうそう (f) わきまえる

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 知識・教養

解説

前半の三つ、特に(b)と(c)は難しい。(a)は「ばっこする」という言葉を知っていれば、その漢字表記を知らなくても文脈から解答できただろう。しかし(b)の「ことほぐ」、「(c)の「きせんとひ」については言葉自体を

知らず、読み方を教えられてもピンとこない人も多いだろう。大抵は漢字の構成(へんやつくり)から音を推測できるが、「祝」「鄙」の二字にはそれも通用しない。いずれの漢字にも共通することは、どちらかといえば書き言葉であり、あまり話し言葉には登場しないという点である。つまり、これまでに読んできた文章の量が得点に直結するということだ。できるだけ多様なジャンルの文章を読んで、語彙を豊かにしておきたいものだ。

問二

解答 調子を合わせている(9字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 知識・教養

解答範囲 I(第1、第4段落、特に第3段落)

解説

この言葉の辞書的な意味を知っている人は、それをそのまま解答としたかもしれない。この場合は、「時流に乗る」という意味になる。しかし、この設問では「他の平易な表現に言い換えなさい」と問われている。つまり、前後の文脈を踏まえた上で、自分の解答が傍線部の「言い換え」になっているか検討しなければならない。

結論からいえば、この設問では辞書的な意味をそのまま解答としても問題はないが、文脈に合わせてより良い解答を作ることができる。もちろん、辞書的な意味を知らなかった受験生も、前後の文脈から適切な解答を導くことができる。傍線部の前後をよく読みながら、順番に考えていこう。

本文を見ていくと、傍線部を含む一文、「いまひとつには、制度的学問がそれに掉差しているところの『人間の死滅』という状況が挙げられる。」の内容を、第3段落のその後の部分で詳しく説明しているとわかる。したがっ

て、その内容を踏まえて、「制度的学問がそれに棹差している」を換言することを考える。

まず、「制度的学問がそれに棹差している」とあるが、この「それ」は「人間の死滅」であることが読み取れる。これまで「学問の発展」は、ヒューマニズムの原理を伴った「近代性の発展」という文脈の中で、「知性の限りない発展」に貢献し、ひいては、「人間の性の最高の発展を実現すること」に貢献するとみなされていた。「近代の学問」においては、そうした理念が「相対に形骸化」していたとしても掲げられていたのである。ところが、現代の「諸学問」においては、そのような「高度な知性と豊かな内面性を持った人間」という理想像が「いまや建前としても消滅し」ているのである。これが「人間の死滅」という言葉が指す状況である。

つまり、『『人間の完成』という理念』は、近代から現代にかけて、形骸化してついに消滅してしまい、その理念を掲げていた学問もまた、形骸化、そして消滅という「流れ」に合わせるように発展してきたのである。このことを踏まえると、「制度的学問がそれ(『『人間の死滅』に)』「棹差している」というのは、「調子を合わせている」といった意味として捉えられるのではないだろうか。

形骸化から消滅という「流れ」を考えると、確かに「時流に乗っている」という意味で捉えられないこともないが、「ここでは、あくまで『人間の死滅』という現在の状況に『棹差している』と述べられていることから、『調子を合わせている』のように、あくまでも現在の状況に合わせているのだということがわかる解答の方が適切だろう。

問三

解答 現実にある知性の不平等とそれに伴う富や権力の不平等を不正だと

して否認し、卓越者を非難する思考回路は、民主制の前提となる、万人が自由かつ平等であるという近代原理の裏返しのか考え方として導かれたという意味。(100字)

難易度 ★★☆☆

設問パターン 要約型十知識・教養

解答範囲 Ⅲ(第6、第10段落、特に第7・第8段落)

解説

傍線部は、「かかる思考回路の前景化こそ、『自由で平等な人間』という近代原理の陰画であり、かつてニーチェやオルテガは大衆社会の悪夢として警鐘を鳴らした事態であった」という一文に含まれている。冒頭の「かかる」は、「現実にある差異を否認することによって、卓越者を悪党に仕立ててしまう」の部分の指している。これは、第8段落2文目『『〇〇が私より富んでいるのは、〇〇が不正を働いているからだ』という思考回路』、第8段落4文目『『〇〇は私より優れているから』という可能性があらかじめ排除されている』を抽象的に述べたものである。

このことを踏まえた上で解答を考えていこう。そもそも、「陰画」というのは、「実物と明暗が逆になっている画像」のことである。したがって、この問題では、「かかる思考回路の前景化」、つまり、「現実にある差異を否認することによって、卓越者を悪党に仕立ててしまう」という思考回路に焦点が当たることは、『『自由で平等な人間』という近代原理』の「明暗が逆になったもの」であるという内容を詳しく説明していくことになる。これが解答の骨格になる。

そもそも、「自由で平等な人間」というのは、大衆民主主義社会の前提となっている考え方である。「前近代の身分制社会」においては、知性やそれに関連した富と権力の格差は、『『生まれながら』のものとして正当化され』

ていた。つまり、人々は「身分」によって縛られており、さまざまな不平等を前にしても、基本的には「分を弁える」しかなかったのである。それに対し、近代の民主制は、「万人が同等の権利を持つ、したがって同等の発言権を持つという前提に立つ」ものであり、人々はかつてのように「身分」に縛られることなく、自由に発言できるようになったのである。

しかし、この「前提」は必ずしも現実に釣り合うものではなかった。「知性の不平等」は存在し続け、それに関連する「より実際的な富や権力の不平等」に、依然として人々は直面している。この「前提」と「現実」のギャップを前にして、不利な立場に置かれた人々は、不平等を「度し難い不正」として認識し、「不満」を抱くことになる。

その結果、『〇〇が私より富んでいるのは、〇〇が不正を働いているからだ』という思考回路」が生まれてくる。もちろん、そのような考え方が正しい場合もあるが、ここで問題となっているのは、第8段落4文目にあるような、相手が自分より優れている可能性を排除している場合である。こうして、「かかる思考回路」、つまり「現実にある差異を否認することによって、卓越者を悪党に仕立ててしまう」考え方が、「自由で平等な人間」という近代原理の裏返しのかえ方として導かれるのである。このような「思考回路」と「近代原理」の関係性を、筆者は「陰画」という比喩で表現したのである。

したがって、解答は、「現実にある知性の不平等とそれに伴う富や権力の不平等を不正だとして否認し、卓越者を非難する思考回路は、民主制の前提となる、万人が自由かつ平等であるという近代原理の裏返しのかえ方として導かれたという意味。」となる。

《解答要素》

- ① 「現実にある知性の不平等とそれに伴う富や権力の不平等を不正だとし

て否認する」

- ② 「①によって、卓越者を非難する思考回路」
 ③ 「すべての人間は自由で、かつ平等であるという近代原理」
 ④ 「③は民主制の前提となっている」
 ⑤ 「①②の思考回路は、③の裏返しのかえ方として導かれた」

※解答は「〜(⑤だ)」という意味。」という形で締めくくられていること。

《参照箇所》

- ① 第7段落4文目、第8段落5文目
 ② 第8段落5文目
 ③ 第7段落4文目、第8段落6文目
 ④ 第7段落4文目
 ⑤ 第8段落6文目

問四

解答

大衆民主主義社会では反知性主義が社会に広く根差しているため、為政者は大衆の知性への憎悪を権力資源として利用し、自らの政治権力の強化を図るが、その一方で大衆が反知性主義的発想から、現実にある権力の不平等を不正と捉え、為政者に対して不満を爆発させる危険性もあり、為政者は自らの政治権力を保持するうえで板挟みの状態にあるから。(160字)

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 要旨把握型

解答範囲 Ⅲ(第6〜第10段落)

解説

傍線部は「そうである以上、政治権力は、愚民化政策を行う権力と同様に

この心情を権力資源として取り込みつつ、かつそれが圧倒的な覇権を握ることを防ぐという微妙な舵取りを迫られる」という一文に含まれている。「そうである」は、「大衆民主主義社会では、反知性主義の心情が社会の潜在的な主調低音となる」を受けていて、「この」、「それ」はともに「反知性主義」を指している。したがってこの設問では、「政治権力」が「愚民化政策を行なう権力と同様に」「反知性主義」を「権力資源として取り込みつつ、かつ」「反知性主義」が「圧倒的な覇権を握ることを防ぐ」という微妙な舵取りをしなければならない理由について考えていくことになる。

本文では、「政治権力」を持っている「為政者」のことも「政治権力」と述べられていることに注意したい。傍線部を含んだ一文の主語である「政治権力」も、「為政者」のことを指していると考えると解答が組み立てやすくなる。

そして、「政治権力」、すなわち「為政者」が「舵取り」を求められる根本的な理由は、「政治権力の維持のため」であることを押さえておきたい。そのうえで、「大衆民主主義社会では、反知性主義の心情が社会の潜在的な主調低音とな」っているため、人民からの支持を得るために「反知性主義」を取り込んだ行動をする必要があるのである。大衆の反知性主義をどう利用するかについては、第6段落に記述がある。「大衆の持つ知性への憎悪」を利用することで、「政敵を武装解除」するのだという。比喩的な表現ではあるが、要するに、反知性主義を利用して対抗勢力(＝「政敵」)を蹴落とすことで、相対的に自らの権力を強めるということである。

ところが、これは危険と隣り合わせの行動でもある。というのも、反知性主義の「〇〇が私より富んでいるのは、〇〇が不正を働いているからだ」という思考に、大衆が至ってしまう可能性があるからだ。為政者が持つ「不平等」、すなわち権力の「不平等」に対して大衆が「不満」を爆発させてしま

うという危険性を為政者は管理しなくてはならなくなる。つまり、為政者は、自分が政治を続けるために政治権力を維持する必要がある、社会の「主調低音(＝広く根差した考え)」としての「反知性主義」を受け入れ、利用することになるが、その一方で「反知性主義」が大衆に広く受け入れられ、その発想が支配的になると、大衆は、「反知性主義」の考え方もとついでに権力の「不平等」を「不正」だと考え、「為政者」に対して強く反発する危険性もあるのである。これによって、為政者は自分の権力のために取り入れた考え方が、かえって自分の首を絞めることになるかもしれないというジレンマに陥ることになる。

したがって、解答は、「大衆民主主義社会では反知性主義が社会に広く根差しているため、為政者は大衆の知性への憎悪を権力資源として利用し、自らの政治権力の強化を図るが、その一方で大衆が反知性主義的発想から、現実にある権力の不平等を不正と捉え、為政者に対して不満を爆発させる危険性もあり、為政者は自らの政治権力を保持するうえで板挟みの状態にあるから。」となる。

《解答要素》

- ① 「大衆民主主義社会では反知性主義が社会に広く根差している」
- ② 「(①なので) 為政者は反知性主義の心情(＝知性への憎悪)を利用する」
- ③ 「(②によって) 為政者は自らの政治権力を強化する」
- ④ 「大衆が反知性主義的発想から権力の不平等を不正と捉える」
- ⑤ 「(④の考え方から) 大衆が為政者に不満を爆発させる危険性もある」
- ⑥ 「為政者は、②・③である一方で、④・⑤の状態に置かれている」
- ⑦ 「(⑥の状況で) 為政者は自らの政治権力を保持するうえで板挟みの状

態にある」

※解答は「〜(⑦だ)から。」という形で締めくくられていること。

《参照箇所》

- ① 第10段落1文目
- ② 第6段落4文目、第10段落2文目
- ③ 第6段落4文目、第10段落2文目
- ④ 第7段落4文目
- ⑤ 第7段落4文目
- ⑥ 第10段落2文目

(小島朋朗、丸岡賢人、正木僚)

2016年度 大阪大学 前期 国語

Ⅱ 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	30分	内田樹『街場の戦争論』からの出題。内田樹は大学入試頻出の著者であり、この問題が出題された2016年には東京大学でも出題されている。	大問Ⅰとは打って変わって、高い語彙レベルが要求されるような文章ではなく、論理展開も明快だったため、本文のレベルは比較的易しいものだったといえるだろう。逆に言うと、その分だけ記述力の有無で得点に大きな差がついたものと思われる。特に、この大問Ⅱでは記述式の設問すべてで「なぜか」を問われており、「どういうことか」を問われている設問と混同して見当違いの答えを書いた受験生も大勢いたと思われる。 問二は「気の毒」と筆者がいう理由を答える問題だった。「すべてを把握できないこと」の不安に脅かされている「こと」が、筆者の「気の毒」という気持ちの理由となっていることを的確に答えられた受験生は意外と少ないのではないだろうか。もう一步踏み込んだ議論が求められる。問三では、

傾向と対策

「原理的に禁じられている」ことの理由を答える必要があった。「原理的に禁じられている」の内容を説明しただけで「なぜか」を説明した気になってしまった受験生が多かったものと思われる。問四は傍線部の中にさらに「どうして〜か」という理由を説明する表現が組み込まれており、注意深く設問を読まなければ、この部分の説明をしてしまうという大きなミスを犯す危険性がある。

受験生の中には、「どういうことか」は説明できても、さらにつつこんだ「なぜか」を説明できない、あるいは、説明した気になってしまいう人が少なくないと思われる。そのような人にとって、この問題は「なぜか」を答えるいい練習になるだろう。受験本番でミスを犯さないためにも、このような基本的なおろそかにせず勉強を進めてほしい。

解答

- 問一 (1) 報 (2) 稽古 (3) 技芸 (4) 進捗 (5) 鑑定眼
- 問二 人々は、未知のものを前にしたときに不安を抱くため、金を払って消費者の立場に立つことで、その価値や有用性について熟知しているか。りをする権利を得て安心しようとするが、その態度は自分に言い聞かせているにすぎず、意味のないことのように思われるから。(120字)
- 問三 師に習ううえで、修行の意味がわからないという自分の無智と無能を自覚し、その無智と無能の形態や態度を判断する基準を持ち合わせていないと認めることが、弟子として修行をする際に必須である最初の

心構えだから。(100字)

問四 自分には才能がないという弟子の発言を聞いて抱いた違和感は、素人である弟子が、身の程知らずにも才能を客観的に判断できるといふ、消費者の立場に無意識のうちに立っていることに対してのものだと気づいたから。(99字)

本文解説

段落解説

I 金銭と引き換えに教育を受けようとする若者(第1〜第3段落)

「若い人たちは」「無収入の修行期間があると言われると」「尻込みする」が、「お金を払って教えてもらうことには抵抗がない」のは、「彼らが『消費者マインド』を深く内面化してしまっているから」だという。「修行」は『いったいこの努力がどういふかたちで、いつ報われるのか予測できない』というプロセス」だが、「学費を払って『教育商品』を購入しているというかたち」をとって、「消費者というスタンス」に立つことで、『この努力がどういふかたちで、いつ報われるのかを私は知っている』という立場」をとることができるのである。

II 全知全能の「消費者」が抱える不安(第4・第5段落)

「消費者」は「全知全能」の存在であると筆者はいう。消費者は「制度的には『神さま』」であるから、「自分がこれから買う商品についてすべてを知っているふりをする権利を有すると同時に、そのような演技をすることを義務付けられている」のである。それゆえ、「人々は『よくわからないもの』を前にするとむしろお金を払うことでそれを熟知しているふりをする権利

を手に入れようとする」。熟知しているふり」によって、『私はこの状況を完全にコントロールしている』と自分に言い聞かせなければならぬほど、「不安だということ」である。

III 無能を判断できる基準を持ち合わせていない弟子(第6〜第14段落)

一方、「弟子はこのような『金で安心を買う』消費者の対極にある存在」である。「弟子の仕事」は「自分がどうしてこんな稽古をさせられているのか、実はよくわからない」ということを認めない限り始まらない。弟子になるときの最初の心構えは、「自分の無智と無能の様態や態度について判断できる『ものさし』を持っていないことを認めること」である。このような『習う』能力そのもの」の方が、「弟子として身につける知識や技術そのものよりも」重要なものであると筆者は考えている。

「よくものを習うときに、『自分はこの道には才能なさそうだし、あまり熱心に稽古に通えそうもないから』という理由でわざわざ二流三流の先生を探す人」がいるが、これも、「ある意味では消費者マインドの現れ」だという。「ものを習い始めるときは全員素人」であり、「その領域においてはどのような能力を優先的に評価するのか、どういう基準で力量を査定するのか」「わかるはずがない」。にもかかわらず、『どうせ才能がありませんから』と言っている人は「業績や才能を客観的に査定するだけの鑑定眼があると主張している」ということになる。『自分に才能がありませんから』という無能の表白は実は『自分には才能のなんたるかがわかっている』という全能の表白でもあり、『才能がある』と『才能の有無が判定できる才能がある』では、後者のほうが質の高い能力だと自分では思っている。そして、「才能がある人間、ない人間、有象無象を鳥瞰する視点を仮想的に想定して、そこに立て、あたかも科学者が観察対象について語るがごとく『僕には才能がありま

せんから』と言っている」のである。筆者は「学生や門人たちに」「僕には才能がありませんから」と「いわれると片付かない気持ちになっ」て、「違和感」を覚えたが、「それを考えているうちに、しだいにどっしって『そういうこと』を言っではいけないのかがわかってき」たという。

百字要旨

お金を払って教育を受けようとする若者は消費者として未知への不安を解消しようとしているが、本来弟子は稽古の意図がわからず能力を測る基準を持たない存在で、弟子による才能への言及は傲慢な全能の表白でもある。

(100字)

用語解説

― 出典：『広辞苑 第六版』(岩波書店)

原理 ものの拠って立つ根本法則。認識または行為の根本法則。

他のものがそれに依存する本源的なもの。世界の根源、ある領域の事物の根本要素。

進捗 ①物事が進みはかどること。

②官位などをすすめるのぼすこと。

有象無象 宇宙にある有形・無形の一切の物。森羅万象。

世にいくらかでもある種々雑多なつまらない人々。

鳥瞰 (鳥が見おろすように) 高い所から広範囲に見おろすこと。転じて、全体を大きく眺め渡すこと。

設問解説

問一

解答 (1) 報 (2) 稽古 (3) 技芸 (4) 進捗 (5) 鑑定眼

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 知識・教養

解説

(2)の「稽古」は少し難しいが、その他は標準的な難易度である。(4)の「進捗」の「捗」は、「捗る」と書いて「はかどる」と読むことも覚えておきたい。また(5)の「鑑定眼」の「鑑」も、「鑑みる」と書いて「かんがみる」と読むということ覚えておこう。

問二

解答 人々は、未知のものを前にしたときに不安を抱くため、金を払って消費者の立場に立つことで、その価値や有用性について熟知しているふ

りをする権利を得て安心しようとするが、その態度は自分に言い聞かせているにすぎず、意味のないことのように思われるから。(120字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 Ⅱ(第4・第5段落)

解説

まず、筆者が「気の毒」だと思っ内容を把握することから始めよう。「気の毒」は、直前の「だから、その顔は誰か他人に見せているんじゃないかって、実は自分に見せているんです。『私はこの状況を完全にコントロールしている』と自分に言い聞かせている。それほど不安だということです。だから、金を出して安心を買おうとする。」という部分に対して筆者が抱いた感情だ

と思われる。ここで、「その顔」は、直前の部分から、『自分がしていることの意味を知っており、自分がどこに向かってるか、これから何をすることについては誰に教えられなくてもわかっている』という顔のことだとわかる。さらに、冒頭の「だから」は、「でも、金を出している間は安心できるんです。金を払って商品を購入するとかたちを取る限り人間は『自分がしていることの意味を知っており、自分がどこに向かってるか、これから何をすることについては誰に教えられなくてもわかっている』という顔をするのことができる。そんな顔しても意味ないと思うんですけど。誰も見えないし」の部分を受けているのだとわかる。さらに、この部分の冒頭の「でも」は、「人々は『よくわからないもの』を前にするとむしろお金を払うことでそれを熟知しているふりをする権利を手に入れようとする。不思議なことをするものですね」の部分を受けているとわかる。

「ここまでの内容から、筆者にとっては、『よくわからないもの』を前にするとむしろお金を払うことでそれを熟知しているふりをする権利を手に入れようとする」のは「不思議なこと」であり、『自分がしていることの意味を知っており、自分がどこに向かってるか、これから何をすることについては誰に教えられなくてもわかっている』という顔をする」とは「意味ない」ことであると感じていて、これらが「気の毒」という筆者の感情と大きくかかわっていると判断できる。

次に、「よくわからないもの」を前にするとむしろお金を払うことでそれを熟知しているふりをする権利を手に入れようとする「人」、『自分がしていることの意味を知っており、自分がどこに向かってるか、これから何をすることについては誰に教えられなくてもわかっている』という顔をする「人」として、筆者はどのような人を想定しているのか考えていこう。まず、第5段落冒頭の「それゆえに」に注目すると、これは、「消費者は自分がこれか

ら買う商品についてすべてを知っているふりをする権利を有すると同時に、そのような演技をすることを義務付けられている」を受けていることがわかる。このことから、筆者が「気の毒」だと思う人は、消費者として「自分がこれから買う商品についてすべてを知っているふりをする権利」を得ようとする人だとわかる。

そのような人は、なぜお金を払って「熟知しているふり」をしようとするのだろうか。第5段落をよく読むとその答えが述べられている。消費者は「よくわからないもの」を前にすると、それについて「熟知している」ふりをして「状況を完全にコントロールしている」と自分に言い聞かせるほど「不安」なのである(第5段落8・9文目)。そして、お金を払って「熟知しているふり」をしている間は「安心できる」(第5段落2文目)のたという。つまり、「消費者」は「よくわからないもの」を前にした時の不安を解消するためにお金を出すのである。

ここで第1段落を見ると、このような人の具体例として、筆者は「無収入の修行期間」には「尻込みする」が「お金を払って教えてもらうことには抵抗がない」「若い人たち」のことを挙げている。彼らは、「修行」という「いったいこの努力がどういふかたちで、いつ報われるのか予測できない」ものに対して、「消費者というスタンスに立つ」て、『この努力がどういふかたちで、いつ報われるのかを私は知っている』という立場」を取り、『私は私からこれから買おうとしている商品の価値や有用性や用途について誰に教えられるまでもなく熟知している』という『ふりをする』権利を手に入れようとするのだという。

この「若者」についての内容を解答に盛り込むかどうか迷ったかもしれないが、第5段落に至るまでの内容を見直すと、「消費者」の立場に立った「若者」についての話題は第3段落でいったん切れており、第4・第5段落では

「消費者」一般について述べられていることがわかる。そして、傍線部の「気の毒」という筆者の感情は、「消費者」一般に対するものであるから、この問題では、あくまでも「消費者」についての内容が解答の中心となる。

したがって、消費者について述べられた第4・第5段落の内容をまとめて、解答は「人々は、未知のものを前にしたときに不安を抱くため、金を払って消費者の立場に立つことで、その価値や有用性について熟知しているふりをする権利を得て安心しようとするが、その態度は自分に言い聞かせているにすぎず、意味のないことのように思われるから。」となる。

《解答要素》

- ① 「人々は未知のものを前にすると不安を抱く」
- ② 「①ゆえに」 お金を払って消費者の立場に立つ」
- ③ 「②によって」 未知のものの価値や有用性について熟知しているふりをする権利を得て安心しようとする」

④ 「②・③は」 自分に言い聞かせているだけにすぎず、(筆者には)意味のないことのように思われる」

※解答は「」④だから。」と締めくくることが。

《参照箇所》

- ① 第5段落1・9文目
- ② 第5段落1文目
- ③ 第5段落1～3文目、第3段落4文目
- ④ 第5段落5～7文目

問三

解答 師に習ううえで、修行の意味がわからないという自分の無智と無能を

自覚し、その無智と無能の様態や態度を判断する基準を持ち合わせていないと認めることが、弟子として修行をする際に必須である最初の心構えだから。(100字)

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 Ⅲ(第6～第14段落、特に第6・第7段落)

解説

傍線部は、「修行をしている弟子は『自分は自分が何をしようとしているか知っている』と思うことを原理的に禁じられている」という一文に含まれている。ここで、「原理的」とは、「ものの拠って立つ、認識または行為の根本法則に基づくさま」という意味である。したがって、「弟子」が根本的にどのような存在なのか考えていく必要があるだろうとわかる。傍線部直後に、「弟子の仕事というのは『自分がどうしてこんな稽古をさせられているのか、実はよくわからない』と認めない限り始まらない」とある。これが解答の中心になると考えられる。つまり、『自分がどうしてこんな稽古をさせられているのか、実はよくわからない』と認め、初めて「弟子の仕事」が始まるのだから、「弟子」は『自分は自分が何をしようとしているか知っている』と思うことを原理的に禁じられているのである。

さらに、第7段落の内容にも注目しよう。「」でも、「弟子になるといふときの最初の心構え」として、「自分の無智と無能について自覚すること、そして」なにより自分の無知と無能の様態や態度について判断できる』ものさし』を持っていないことを認めること」が挙げられている。「」で、「無智と無能について自覚すること」という内容が、第6段落3文目の『自分がどうしてこんな稽古をさせられているのか、実はよくわからない』ということ』を認めるという内容と対応していることに気がつきたい。弟子は、自

分の稽古の意味についても「無智」「無能」であり、それを自覚したうえで、そうした「無智」「無能」の「様態や態度」を測る「ものさし」を持っていないことを認めるのが、弟子としての「最初の心構え」であり、この心構えがないと弟子としての仕事は始まらない、言い換えれば、この心構えは弟子にとって必須のものなのである。「ものさし」は比喻表現なので、「〴〵を判断する基準」などと言い換えればよいだろう。また、本文の「無智」は解答において「無知」と書き換えてしまっても問題ない。

以上より、解答は、「師に習ううえで、修行の意味がわからないという自分の無智と無能を自覚し、その無智と無能の様態や態度を判断する基準を持ち合わせていないと認めることが、弟子として修行をする際に必須である最初の心構えだから。」となる。

《解答要素》

- ① 「師に習ううえで」
- ② 「①において」稽古の意味がわからないという自分の無知・無能を自覚する
- ③ 「②に加えて」自分の無智と無能の様態や態度を判断する基準を持ち合わせていないことを認める
- ④ 「②・③は」弟子として修行をする際に必須である最初の心構え

※解答は、「〴〵④だ」から。」と締めくくることが。

《参照箇所》

- ① 第6段落3文目
- ② 第7段落1文目
- ③ 第7段落1文目
- ④ 第6段落3文目、第7段落1文目

問四

解答

自分には才能がないという弟子の発言を聞いて抱いた違和感は、素人である弟子が、身の程知らずにも才能を客観的に判断できるといって、消費者の立場に無意識のうちに立っていることに対してのものだと気づいたから。(99字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 Ⅲ(第6～第14段落、特に第9～第14段落)

解説

傍線部より前の部分を読むと、傍線部中の「そういうこと」は、「僕には才能がありませんから」といった内容のことだとわかる。次に、傍線部は「それを考えているうちに、しだいにどうして『そういうこと』を言っていないかがわかってきました」という一文に含まれている。冒頭の「それは」「自分がそう言っているときには気づかなかつたけれど、学生や門人たちにそういうられると片づかない気持ちになった。どうして違和感があるのか」の部分の指しているところとわかる。さらに、「そう言って」いたのは、「僕には才能がありませんから」といった内容であることも、容易に判断できる。したがって、この問題では、筆者が「学生や門人たち」の「僕には才能がありませんから」というような発言を聞いて「違和感」を抱いて、それがなぜなのかを考えていると、「〴〵として自分には才能がないといった内容のことを言っただけなのかがわかってきた」と筆者がいう理由を考えていくことになる。

まず、大前提として、「僕には才能がありませんから」といった内容の発言をしてはいけけないと筆者が考える対象は「弟子」である。「弟子」は、「ものを習い始めるとき」は「素人」であり、「その領域においてはどのような

能力を優先的に評価するのか、どういう基準で力量を査定するのか、素人にわかるはずがない」。にもかかわらず、『どうせ才能がありませんから』と言いつけることは、「業績や才能を客観的に査定するだけの鑑定眼があると主張している」ことを意味する。

ここで、一度傍線部の内容を把握しなおそう。「どうして『そういうこと』を言っただけなのかい」については、実は本文に書かれている。傍線部直前の段落を見ると、『自分に才能がありませんから』という無能の表白は実は『自分には才能のなんたるかがわかっていない』という全能の表白でもあるわけだからです。そして、『才能がある』と『才能の有無が判定できる才能がある』では、後者のほうが質の高い能力だと自分では思っている。才能がある人間、ない人間、有象無象を鳥瞰する視点を仮想的に想定して、そこに立って、あたかも科学者が観察対象について語るがごとく『僕には才能がありませんから』と言っているわけです」とある。「ここから、「どうして『そういうこと』を言っただけなのかい」という問いに対する答えは、『自分には才能のなんたるかがわかっていない』という全能の表白でもあるわけだから」とわかる。第11段落5文目にあるように、これは「専門家を『なめた』発言、つまり身の程知らずな発言であると筆者は考えている。これを踏まえると、傍線部は、『自分には才能のなんたるかがわかっていない』という、身の程知らずな全能の表白でもあるわけだからだとわかってきました」ということを意味しているのだとわかる。そして、筆者がこのように「わかってきました」という理由を考えなければならぬ。「どうして『そういうこと』を言っただけなのかい」を説明しただけでは不十分であり、その理由が「わかってきました」と筆者がいうのは「なぜか」を答えなければならぬのである。

ここで、筆者に「違和感」を抱かせた、素人による才能の判断に注目して

本文を見てみると、この才能の「値踏み」の根本にあるものが見えてくる。第9段落を見てほしい。「よくものを習うときに、『自分はこの道には才能なさそうだし、あまり熱心に稽古に通えそうもないから』という理由でわざわざ二流三流の先生を探すがいます」、「自分程度の人間には、それにふさわしいレベルの教師のほうがフィットするんじゃないかと、そう思っている。これもある意味では消費者マインドの現れだと思えます。手持ちの貨幣が少なからず、買えるとしたら『まあ、この程度の品物かな』と値踏みしている」という部分から、「弟子」が「消費者マインド」を發揮して「先生」を選ぶ場合が多いと言及されている。これが、先ほどの「なぜか」の答えとなるのではないだろうか。つまり、筆者が、「弟子」の「僕には才能がありませんから」といった内容の発言を聞いて「違和感」を覚えたのは、「弟子」というのは、最初は「素人」であり、「その領域においてはどのような能力を優先的に評価するのか、どういう基準で力量を査定するのか、素人にわかるはずがない」のに、「業績や才能を客観的に査定するだけの鑑定眼があると主張」する「消費者」の立場に無意識のうちに立って「弟子」が発言しているからだとすることに気づいたからなのである。また、それによって「どうして『そういうこと』を言っただけなのかい」(＝「自分には才能のなんたるかがわかっていない」という全能の表白でもあるわけだから」ということ)がわかってきたのである。「消費者の立場からの発言」↓「全能の表白」というロジックは、本文の前半部分とも対応する。

したがって、解答は、「自分には才能がないという弟子の発言を聞いて抱いた違和感は、素人である弟子が、身の程知らずにも才能を客観的に判断できるといって、消費者の立場に無意識のうちに立っていることに対してのものだと気づいたから。」となる。

《解答要素》

- ① 「自分には才能がないという弟子の発言を聞いて抱いた違和感」
 - ② 「(①の発言は)素人であるはずの弟子が才能を客観的に判断できる」と主張している」
 - ③ 「(②は)身の程知らずな態度である」
 - ④ 「(②のような弟子は)消費者の立場に無意識のうちに立っている」
 - ⑤ 「①は③に対してのものだと気づいた」
- ※解答は、「(⑤だ)から。」と締めくくることが。

《参照箇所》

- ① 第14段落1・2文目
- ② 第11段落4文目
- ③ 第11段落5文目
- ④ 第9段落4文目

(小島朋朗、丸岡賢人、正木僚)

2016年度 大阪大学 前期 国語

Ⅲ 古文(紀行文)

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★★☆	20分	武女『庚子道の記』からの出題。旅の道中について記した江戸時代の紀行文である。各地の描写とともに、かつての思い出や、古典の知識や故郷への念がつつらられている。	2015年度と同じく紀行文からの出題である。文章の長さや難易度は例年通りである。大阪大学は和歌解釈の出題頻度が高いのが特徴だが、基本的な単語がほとんどで本文の読解はたやすかっただろう。注も含め、和歌が多数あるが、難解な修辞法が用いられておらず、地の文と同じように読解ができる。江戸時代の文章は比較的簡潔で読みやすいため、平均点が上がりにやすい。しかしコロコロ場面転換するため、話の流れについていけるかどうかのポイントとなる。ミスをしないうよう、丁寧に文法を確認しながら読んでいく。

傾向と対策

「説明せよ」という要求に応えるためには記述力が必要となる。記述力のトレーニングには基礎知識があることが大前提である。まずは、単語帳や文法書を通じて重要単語や助詞、和歌の修辞に関する知識を身につけ、そのうえで演習を積み、《満点答案》と自分の記述を比較して自分に何が足りないのかを省みつつ学習を進めていこう。

《この解説の使い方》

本文読解

「本文を読み始める前に」と「通読」からなる。古文の実力のある人が実際に本文を読むとき何を考えているか(「本文を読み始める前に」および「通読」の◎部分)や設問解説では述べられなかった重要なポイントなど(「通読」の★部分)について書いてある。どこに注意して本文を読めばいいかわからない人、本文を読むのに時間を使いすぎる人は、この項目を見てもみよう。

設問解説

設問ごとの詳細な解説を、古文が苦手な人にも思考の流れが十分に伝わるように書いてある。古文が苦手な人はまずは「合格答案」レベルの解答を、得意な人は「満点答案」を目指そう。

本文解説

「現代語訳」と「用語解説」からなる。「現代語訳」は基本的に受験生レベルの古文知識で作れる簡単な訳になっている。ほかの項目を読み終えたあとの復習に使おう。

解答

問一 (1) 修行者 (2) 筆者

問二 (3) 寝てしまおう (6) 焼かないでほしい

問三 古今集では散った桜を鑑賞の対象と捉えていないが、本文では散った状態も美しいとみている。(43字)

問四 蕨の成長のための野焼きの火が、強く吹いてきた風で強まり、自力で早めに芽吹いた蕨をも焼き尽くしてしまうこと。(53字)

問五 伊勢物語の修行者は清貧で、手紙を信頼して託せる顔見知りであるが、本文の修行者は肥えた俗人で、勝手に手紙を読むのではないかと邪推させるほど信頼できない見知らぬ人である。(83字)

本文読解

本文を読み始める前に

紀行文は、旅の道中の様子を著した日記のようなもの。ちなみに旅行が行したのは、鎌倉幕府が関東に設置され、政治・文化の中心が東西に分立したためである。紀行文はオムニバス形式になっていることが多い。道中の出会いや風流なものについて記される傾向にあるので、本文のキーワードは道中の自然や出会いだと推測できる。注の和歌は現代語訳の章で説明しているので参照してほしい。

通読

第1段落第1行〜第2行「宇津の山越しくやさし。」

◎修行者と法師の比較。

◎「やさし」は多義語だが、文脈から「殊勝だ・感心だ」と判断する。

★「修行者」は仏道修行のために諸国を行脚する僧のこと。

第1段落第2行〜第3行「の行者どくふかくや。」

◎行者＝修行者。

◎「あしき」は形容詞「悪し」の連体形だが、直後に体言がないため、「精進物の」の「の」は同格だ。「精進物のあしき」は直訳すると「精進料理で不味いもの」。

◎筆者の経験にもとづく紀行文なので、最後の「けり」は間接過去ではなく、詠嘆。

◎彼＝修行者。直前の流れからも、修行者に対するイメージ（修行者なのに太って俗っぽい）からも判断できる。

◎「見るらむ」の「らむ」は現在推量。

◎「罪ふかくや」の「や」は疑問・反語の係助詞。本来ならば、「罪ふかくやあらむ」だが、「あらむ（動詞「あり」＋推量の助動詞「む」終止形）」が省略されている。

第1段落第4行〜第5行「山の岨にす津の山辺に」

◎「すみれの咲きたるを」の後に「見て」「見つけて」などが省略されている。

◎「精進物のあしき」の場合と同様に「すみれの咲きたる」の「の」は同格。よって直訳は「すみれで咲いているもの」＝「咲いているすみれ」

★「心にまかす」とは「心まかせ」ということ。

★この和歌は、(注3)の和歌を模して詠まれた本歌取りの歌である。

第2段落第1行〜第2行「深山木の中らめでたし。」

◎「桜の咲きたる」の「の」は同格。

第2段落第3行「雲と見え雪く宇津の山河」

◎桜の花は咲いているときも散っているときも散った後も美しいことを詠んでいる。

第3段落第1行～第2行「丸子の宿のくもとなし。」

◎「蕨のために焼くなり」と答えた人は文脈から地元の人だと推察される。

◎「ただ春のひに」とは(注5)より、「焼かずとも草はもえなん春日野はただ春のひに任せたらなん」(新古今集)の引用だとわかる。この和歌を訳すと、「焼かなくても草は芽吹くだろう春日の野原では。ただ春の日差しに任せてしまいたい」となり、野原を燃やすことに否定的な思いを表している。

(注5)「焼かずとも寄せたらなん」

◎「もえなん」は下二段活用動詞「萌ゆ」連用形+強意の助動詞「ぬ」未然形+推量の助動詞「む」で、「萌えるだろう」＝「芽吹くだろう」という意味。

◎「任せたらなん」はサ行下二段活用動詞「任す」連用形+完了の助動詞「たり」未然形+願望の終助詞「なむ」で「任せてしまおう」という意味。

第3段落第3行「春の野に下くもあらなん」

◎「さのみ」＝「そむむやみに・そのようにばかり」。

◎「あらなん」の「あら」は動詞の未然形なので、「なん」は他者への願望の終助詞。

設問解説

問一

解答 (1) 修行者 (2) 筆者

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 主語特定

解説

「彼にそぞろなる文などことづけたらば、物ゆかしがりて、おのれまづひらきても見るらむと思ひやるも罪ふかくや」を簡単に訳してみると『彼』にたわいもない手紙などをことづけたならば、興味をもって、自分で開いて(中身を)見るだろうと想像するのも罰当たりだろうか」となる。この箇所を展開する行為は、

①「誰かA」が「彼」に手紙をことづける。

②(已然形+接続助詞「ば」で主語が変わる場合がある)「誰かB」が手紙に興味をもつ。

③(「て」の場合は主語が変わらない)「誰かB」が手紙を開いてみる。

④③の動作を「誰かC」が想像する。

手紙を受け取ったのは「彼」なので、中身を見るのも「彼」。よって「誰かB」＝「彼」。

それぞれの動作の主語の候補として挙がるのは、これまでに登場した修行者・法師・筆者である。直前に、「この行者どもは肥えあぶらづきて、つねに精進物のあしきを食ふとは見えざりけり」とあり、行者(＝修行者)は修行中の身とは思えないほど俗っぽいと描写されている。直前の流れからも、修行者に対するイメージからも「彼」＝修行者だとわかる。本文は随筆のようなものなので、①③を「思ひやる」のは筆者である。よって「誰かC」＝筆者。

古典の世界において、主語は省略されがちだが、その場合は、「書いてないからわからない」のではなく、「書いてないからこそ、主語は筆者自身か、筆者が日常的に身近に感じている人だ」と考えよう。私たちが日常会話で省略を用いているのと根本的には同じなのである。

主語を判断する方法を整理しておこう。

・敬語表現で考える

身分などの上下関係がある場合には、尊敬語：主体は高貴な人、謙譲語：客体が高貴な人など、敬語の使われ方で主語を識別できる。しかし、身分関係がそのまま敬語の使用の有無に反映されない場合(互いに敬語を用い合っている場合)、敬語がそこまで適切に使用されていない場合(擬古物語など)があるので、常に正確に識別できるわけではないので注意が必要である。

・接続助詞で判断

接続助詞が「て」「で」の場合、主語は変化しない。一方で、接続助詞が「ば」「ど」「を」「に」「が」の場合、主語が変化しやすい。

・文学知識を用いる

源氏物語のような難解で登場人物が多い作品の場合、登場人物とその人物関係をあらかじめ知っていて、内容に大体の見当がついていると非常に読みやすい。著名な作品の著者・時代・内容・登場人物をあらかじめインプットしておく、その作品が出題されたときのみならず、それと類似の作品(擬古物語など。本文では伊勢物語とリンクしている部分が多数存在している)が出題されたときも、人物関係や事実関係を把握しやすく、動作の主体を的確に推測できる。

しかし、試験時間中はここまで考えられる時間がないかもしれない。今回の場合は「らむ」で推量されている部分の動作の主語は筆者ではない、という考え方をいけば時間の短縮になる。

問二

解答

《合格答案》

(3) 寝よう (6) 焼かないでほしい

《満点答案》

(3) 寝てしまおう (6) 焼かないでほしい

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

(3)

「なむ」には、他者への願望(あつらえ)を表す終助詞「なむ」と、確述用法の助動詞「なむ」があり、前者は未然形に、後者は連用形に接続する。

「寝」は十行下二段活用動詞であり、「ね／ね／ぬ／ぬる／ぬれ／ねよ」と活用するので、この場合の「寝」は未然形か連用形か終止形である。終止形に接続する「なむ」はないので、自動的に未然形か連用形と判断できる。現代語訳は、前者の場合「寝てほしい」、後者の場合「寝よう、寝るに違いない」となる。本文の場合、寝る可能性がある人物は、他者ではなく自分自身なので、他者への願望を意味する前者は不適。文脈から、適切な訳は「寝よう」だとわかる。このままでも十分正解だが、より確述用法らしく解答できるとなお良いだろう。確述用法の訳は、推量の場合「きつとくだろう」「くするにちがいない」「くしてしまえそう」、意思の場合「くしてしまつつもり」「きつとくしよう」「くしてしまおう」などがある。

(6)

ポイントは「なむ」の意味判断。「あらなん」の「あら」は動詞の未然形

なので、「なん」は他者への願望の終助詞。直訳して「焼かないでほしい」となる。

「なむ」は未然形に接続するか連用形に接続するかで意味が大きく異なるので注意しよう。「くもあらなむ」を用いた和歌に、

高砂の尾の上の桜咲きにけり外山の霞たすもあらなむ（権中納言匡房）

（訳）遠くにある高い山の頂にある桜が咲いたなあ。美しい桜がかすんでしまわないように 人里近くにある山の霞が立たずにいてほしい。

というものがあり、ここにおける文末の「なむ」も願望の終助詞で、「立たないでいてくれ」という願いを詠っている。

問三

解答

《合格答案》

古今集では桜は残らず散るから美しいとみているが、本文では桜は散った後も美しいとみている。（44字）

《満点答案》

古今集では散った桜を鑑賞の対象と捉えていないが、本文では散った状態も美しいとみている。（43字）

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 和歌

解説

まずは、傍線部(4)の歌と『古今集』の歌を訳し、相違点を比較しよう。

傍線部(4)の歌「雲と見え雪と散り行くはまた花の波たつ宇津の山河」

を訳すと、「(桜の花が)雲のように見え、雪のように散り行く先は、再び花が浮かんだ水面が波立つ宇津の山河である」となり、どんな状態でも美しい

桜の様子を詠んでいる。また、和歌の解釈ができなくても、「桜の咲きよぼゆる。ちりて谷川に流るるさま、はためたし。」として詠んだ和歌であることから、散った後の桜の美しさについて詠んでいる歌とわかる。一方、『古今集』の歌「のこりなく散るぞめでたき桜花ありて世の中はての憂ければ」は「完全に散るのが素晴らしいのだ桜の花は。世の中、あり続けた先はつらいものだから」となり、桜は散るから美しいと詠っている。両者を比較すると、古今集は、桜は残らず散るから美しく、本文では桜は散った後も美しいとしている。この散る桜に対する認識の違いを対比関係を意識しながら、まとめて記述する。

余裕があるならば、問題文の「桜の散った後に対する見方」という部分に注目してみよう。古今和歌集の歌は、桜が散ることについて詠んでいるが、散った後桜は消えるものだと考えているため、その後言及はしていない。一方、本文の歌は、散った後、河に流れている様子を詠んでいるため、いかなる場合も自然に目を向ける筆者の優しく繊細な視点が読み取れる。以上のポイントを踏まえると《満点答案》となる。

ちなみに、桜の散る様子を哀愁こめて詠んだ歌は多数存在する。

（例）

世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし（伊勢物語）

（訳）この世の中にまったく桜がなかったのなら春の人の心は平穏だろうに。

散ればこそいと桜はめでたけれうき世になにか久しかるべき（右の返歌）

（訳）散るから桜は素晴らしいのだ。この憂うことの多い世の中に何が長い間存在するだろうか。いや何も存在しない。

散りぬればのちはあくたになる花を思ひしらすもまどふてふかな(僧正遍照)

(訳) 花は散ってしまったえば汚いごみになることを知らずに蝶はその美しさに惑わされて飛び戯れている。

いずれも、桜が散ることのはかなさ、その刹那的な美しさを詠んでいる。

問四

解答

《合格答案》

山の火が風によって延焼し、早めに芽吹いた蕨を焼き尽くしてしまうかもしれないこと。

《満点答案》

蕨の成長のための野焼きの火が、強く吹いてきた風で強まり、自力で早めに芽吹いた蕨をも焼き尽くしてしまうこと

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明(要約型)

解説

傍線部の前後を読んでみる。

「丸子の宿のうしろの山に火のたかく燃ゆれば、うちおどろかれて、『あれはいかに』と問へば、『蕨のため焼くなり』といらふ。『ただ春のひに』と思はるるに、風さへ吹けば、いと心もとなし。

春の野に下もえいそぐ早蕨をさのみは人の焼かずもあらなん」

このあたりを訳すと、「丸子の宿駅の後ろにある山で、火が高く燃えているので、驚いて、『あれはどうしたことか』と尋ねると、『蕨のために焼いているのです』と答えた。『ただ春の日差しに』と思っていると、風までもが

吹いたので、とても気がかりだ。春の野原で急いで芽を出す早蕨をそむやみに人は焼かないでほしい」となり、山の火が風によって延焼して早くに芽吹いた蕨を焼いてしまうのではないかと筆者は「心もとな」く思っている。

「蕨のため焼くなり」という言葉から山の火は、植物を焼いて肥料とする「野焼き」(一種の焼畑農業)だとわかる。筆者は「わざわざ燃やさなくとも春の日差しに任せればよいだろう」と考えており、強引で人工的な野焼きに否定的である。野焼きの前に自力で芽を出した、早蕨が野焼きのとばっちりを受けてしまうのではないかと心配しているのである。

問五

解答

《合格答案》

伊勢物語の修行者は顔見知りであり、手紙を信頼してことづけられる人であるが、本文の修行者は俗っぽく、勝手に手紙の中身を見るのではないかと邪推してしまうほど信頼できない人である。(87字)

《満点答案》

伊勢物語の修行者は清貧で、手紙を信頼して託せる顔見知りであるが、本文の修行者は肥えた俗人で、勝手に手紙を読むのではないかと邪推させるほど信頼できない見知らぬ人である。(83字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明(要約型)

解説

まずは問題文に引用されている伊勢物語を通読しよう。

どんどん行き進んで駿河の国に着いた。宇津の山に到着して、自分が入るうとする道は、とても暗く細いもので、蔦や楓が茂り、なんとなく心細く、

(この道で) 思いがけない目に遭うのだろうと思っていたところ、修行者に会った。「このような道を、どうしていらっしやるのですか」と(修行

者が)言うので見てみると、知っている人だった。(そこで)京に、あの人の御もとに(届けよう)と思って、手紙を書いて、(修行者に)ことづけた。

駿河の宇津の山べでは、現実でも夢の中でもあなたに会わないなあ。

次に、伊勢物語と本文の修行者の特徴をまとめよう。

○伊勢物語の修行者

- ・顔見知り
- ・徒歩

・ちゃんと修行をしている

・手紙を託した

○本文の修行者

・初めて会った人たち

・馬に乗っていた

・肉づきがよくつややか

・精進料理を食べていないようだ

・手紙を託したら、興味を持って勝手に中身を見そつである

以上を対比的に捉えると、

伊勢物語の修行者⇨顔見知りで清貧で信頼するに足る人物

本文の修行者⇨見知らぬ人で俗っぽく信頼できない人物

となるので、これを記述する。

字数に余裕があるなら、本文の「昔物語のけしきにはあらで」に注目しよう。伊勢物語の修行者は清貧でしっかりと修行をしているのに対し、本文の修行者は俗っぽくまともに修行していないという描写も織り込んでおこう。

本文解説

現代語訳

宇津の峠越えて修行者二、三人に会った。昔物語(⇨伊勢物語)の様子とは異なり、馬に乗って(峠を)渡っていた。法師などは、いつも徒歩でみすぼらしいが、様態は感じがよく殊勝である。この修行者共は、肉づきがよくつややかで、毎日精進料理の不味いものを食べているとは思えない。修行者にたわいもない手紙をことづけたならば、興味をもって、自分で開いて(中身を)見るだろうと想像するのも罰当たりだろうか。

山の崖にすみれが咲いていたのを(見つけて)、

やすみれ……(ああ、すみれよ。気まぐれな旅ならば、一晩くらいは

寝てしまおう、宇津の山辺で)

奥深い山に生えている木々の中に桜の咲いている木を見つけたときは、本当に道しるべを得た気持ちが出て、素晴らしきとも美しいとも思えた。(桜の花が)散って谷の川に流れる様子もさらにまた素晴らしい。

雲と見え雪と散り行くはてはまた花の波たつ宇津の山河

雲と見え……(桜の花が雲のように見え、雪のように散り行く先は、再

び花が浮かんだ水面が波立つ宇津の山河である)

丸子の宿駅の後ろにある山で、火が高く燃えていたので、驚いて、「あれはどうしたことか」と訊けば、「蕨のために焼いているのです」と答えた。「ただ春の日差しに(任せてほしい)」とっていると、風までもが吹いたので、とても気がかりだ。

春の野に……(春の野原で急いで芽を出す早蕨をそうむやみに人は焼かないでほしい)

・注の和歌の現代語訳

(注3) 春の野に……(春の野原ですみれを摘みに来た私だが野原に心引かれて一晩寝てしまった)

(注5) 焼かずとも……(野焼きをせずとも草は芽吹くだろう春日の野原では。ただ春の日差しに任せておいてほしい)

・問五の伊勢物語の現代語訳

どんどん行き進んで駿河の国に着いた。宇津の山に到着して、自分が入ろうとする道は、とても暗く細いもので、蔦や楓が茂り、なんとなく心細く、(この道で) 思いがけない目に遭うのだろうと思っていたところ、修行者に会った。「このような道を、どうしていらっしやるのですか。」と(修行者が) 言うので見てみると、知っている人だった。(そこで) 京に、あの人の御もとに(届けよう) と思って、手紙を書いて、(修行者に) ことづけた。駿河の宇津の山辺では、現実でも夢の中でもあなたに会わないなあ。

用語解説

けしき 様子・表情

やさし ①つらい・恥ずかしい(奈良時代)

②優美だ(平安時代)

③殊勝だ(鎌倉〜室町時代)

④優しい(江戸時代以降)

・時代によって意味が大きく異なる単語である。要注意。

そぞろなり ①(連用形「そぞろに」の形で) なんとなく・むやみに②理由がない③関係がない

物ゆかしがる「他三四」 ①何かにつけて②見たがる・聞きたがる・知りたがる

る

・接頭語「もの」+形容詞「ゆかし」(見たい・聞きたい) +接尾語「がる」

おのれ ①自分自身②私③おまえ

思ひやる「他三四」 ①気晴らしをする②思いをはせる③気遣う

めづらし 素晴らしい

あはれなり 心にしみる・美しい

めでたし 素晴らしい

いらふ「自八下二」 答える・返事をする

いと とても

心もとなし ①不安だ②じれったい

【コラム①】和歌の技法

・本歌取り

本歌取りとは、昔の有名な歌の用語や語句などを取り入れて歌を詠むことである。もとの歌(本歌)とあわせて二重の味わいを楽しむものである。

本文で登場した伊勢物語の和歌にも本歌取りの歌がある。

春日野の 若紫の摺り衣 しのぶの乱れ かぎりしられず

春日野に生えている若紫で摺り染めたこの着物のしのぶ摺りの模様のように、美しい貴女方を恋慕う私の心は限りなく思い乱れています

これは美しい姉妹に主人公が贈った歌だが、

みちのくの しのももづ摺り 誰ゆるゑに 乱れそめにし われ
ならなくに

陸奥で作られるしのももづ摺りの模様のように私の心が乱れている
のは誰のせいでしょうか。私のせいではないのに（あなたのせ
いですよ）

という心に秘めた片思いを詠んだ古今和歌集の歌をもとに詠んで
いる。

・掛詞

一語で二つの意味をもたせる技法で、現代でいう駄洒落である。

花の色は うつりにけりな いたづらに わが身世にふる な
がめせしまに

花の色（美貌）はすっかり色あせてしまったなあ 長雨が降っ
ている間に ぼんやりと物思いにふけている間に

これは小野小町の歌だが、「ふる」は「降る」と「経る」、「ながめ」
は「長雨」と「眺め」の掛詞である。この掛詞によって、長雨に
よって色あせた桜の色に物思いにふけている間に衰えてしまっ
た自身の美貌を重ねてより深い味わいのある歌になっている。

・縁語

語句に関係の深い言葉を連ねて、「面白味を出す技法である。

玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば 忍ぶることの 弱り
もぞする

魂と肉体を結ぶ糸よ 切れるなら切れてしまえ 生きながらえ
てしまったら 恋心を抑える理性が弱くなって困るから

これは齋院である式子内親王が詠んだ歌で、忍ぶ恋がテーマであ
る。玉の緒とは命のことであるので、命と関係の深い「絶ゆ（絶
命する）」「ながらふ（生きながらえる）」「弱る（衰弱する）」が縁
語となっている。

【コラム②】野焼き

本文では春に早蕨のために山を焼いているシーンが登場している
が、これは「野焼き」の場面である。新しい草がよく生えるよう
に、早春、野原の枯れ草を焼いてその灰を肥料にする。

（山縣奏、築島愛美、山崎恭子）